

寒冷期（1～2月）の乾椎茸栽培管理について

1. ほだ場（ほだ木）の管理

(1) 寒子づくり

○防風対策の徹底

・芽切ったシイタケが寒風によって枯死することを防ぐため、ほだ場の周囲をダイオネット等で覆い風を防ぎましょう。発芽したシイタケは寒さより風による乾燥で枯死しますので十分な防風対策を行いましょ。

また、風を防ぎ、ほだ場を暖かくすることは、ほだ木水分の保持にもなり、春子の順調な芽切りを促すことにつながります。

○袋掛け、ホダ木コートやビニール掛けで良品作り

・芽切ったシイタケの枯死を防ぎ、生長を促進するため、「袋」や「ホダ木コート、ビニール」掛けを積極的に行い保温・保湿を図りましょ。（袋掛け・ビニール掛けは別紙を参照）

ビニール掛けはほだ木全体を覆うが、天気が良く気温の高い日中はビニールを開け温度上昇に伴う品質低下を防ぎましょ。採取前には「袋」や「ビニール等」を外し1～2日程外気に当て採取すると良品となります。

(注) 採取後は必ずホダ木コート、ビニールを外し、次の芽切りのためにほだ木に水分を補給しましょ。

○生長散水の実施

・乾燥した日が続き発芽したシイタケの生長が遅れている時は、日中の温度が10℃以上の暖かい時間に短時間の生長散水（10分～15分程度）を行いましょ。

* 今年、中低温性品種の発生が遅れ、現在でも芽切りや生長中のきのこが見られます。ほだ木コートやビニール被覆等で早めに収穫し、春の発生に向けてほだ木を休養させましょ。

2. ほだ木作り

(1) 原木の玉切り

1月、2月は原木の伐採時期から40～60日が経過し玉切り・植菌の時期を迎えます。

玉切り時期は直射日光の当たってない原木元口のひび割れが中心部から1/3～2/3程度入った頃が目安とされています。

玉切り時期を迎えた原木は、次の要領で玉切りを行いましょ。

イ 山の上部の原木から下部の原木へ順に玉切る。

ロ 細い原木から先に玉切る。

ハ 日当たりの良い所から先に玉切る。

ニ 玉切った原木は、直接地面に接しないよう枝などを下に敷いて集積し、笠木を掛けて直射日光が当たらないように管理する。

(2) 植菌・仮伏せ

・玉切り・集積が終了したらなるべく早めに植菌し、仮伏せを行いシイタケ菌の初期活着を促す。仮伏せは植菌した種駒の乾燥を防ぎ初期活着を促進するための重要な作業です。仮伏せは、ほだ木が直接地面に接しないように枝などを下に敷き30cm程度に棒積みにし笠木で覆う。

*植菌時期は、2月上旬から4月上旬（梅の開花時期から始め桜の開花時期までに終了する。）

梅の開花（平年）：1月29日

桜の開花（ソメイヨシノ平年）：開花3月27日 満開4月5日 *大分地方気象台資料

*仮伏せしたほだ木は、梅雨入り前までには本伏せに移行しましょう。

本伏せ移行時期は、4月下旬～5月上旬

(3) 散水による仮伏せ管理

○散水が可能な場所でほだ木づくりを行う場合

【方法】

木片駒の場合、植菌後ほだ木を棒積みにし笠木やダイオネット等で覆い、一晩十分散水する。その後降雨がなければ2日～4日毎に2時間程度の散水を行う。

【場所】

水はけが良く、日当たり、通風が比較的良く、できれば本伏せの場所に近い場所。人工ほだ場を利用するのも良い。

仮伏せの必要性

木片駒の含水率は、50～60%であり、40%前後で安定した成長を示し20%以下に低下すると外部からの水分補給がなければ成長できなくなります。

原木に接種された木片駒の含水率は、降雨が無ければ、4～5日後（日平均気温が8℃～10℃の時）には30%以下に低下し菌糸の成長が弱ります。

接種した種駒の水分保持を図ることが初期の活着・伸長に重要ですので、仮伏せ（仮伏せ時の散水管理）を励行しましょう。

3. 雪害予防

被害防止対策の徹底

寒波の襲来により、降雪・積雪が予想されます。天気予報（特に週間天気）に十分注意し、椎茸生産施設（ハウス、人工ほだ場）の被害を未然に防ぎましょう。降雪がある場合はこまめに施設を回り、十分な対策を講じましょう。

◎「第4回東部地区乾椎茸品評会」を平成22年4月下旬に開催予定ですので、たくさんの出品をお願いします。上位入賞を目指し、良品づくりに努めてください。

◎チェーンソー等機械器具を十分点検し、作業時は、ヘルメットを着用し、労働安全に努めてください。「注意1秒、けが一生」です。

◎原木供給事業、自動植菌機、ユニック付きトラック+フレームで起こし木作業等省力化に取り組んでいる事例が多く見かけられます。規模拡大と重労働軽減のためには「省力化作業」は重要なことです。所得向上につながります。

袋かけで準備UP!

1. 袋掛けの効果は

(1) 一回り大きなシイタケで収穫できる

・方法や時期にもよるが、きのこは10~20%大きくなる

(2) 乾燥仕上がりが軽く、色が良い

(3) 芽が乾燥で枯死するのを防ぐ

2. 袋掛けの時期は

(1) 寒い時期ほど効果は大きい

3. 袋掛けの方法は

(1) 全体を覆う



- ・厳寒期
- ・風通しがよいほど場
- ・温度がとれないほど場

(2) 傘の上のみを覆う



- ・傘に亀裂があるもの
- ・雨が降る前(雨子防止)
- ・温度がとれるほど場

(3) 通気性のあるビニールの方がよいので専用のポリ袋を使用する(通気が悪いと雨子状態となる)

(4) 収穫予定の1~2日前に袋を取り外気に当てた後に採取する

1月から2月の寒い時期にシイタケを順調に成育するには保温、保湿が必要です。

「シイタケの成育温度、湿度の確保」

- ・低温性菌では最高気温を10℃～13℃程度確保する
- ・空中湿度65%以上の確保 それ以下では成長が止まる傾向

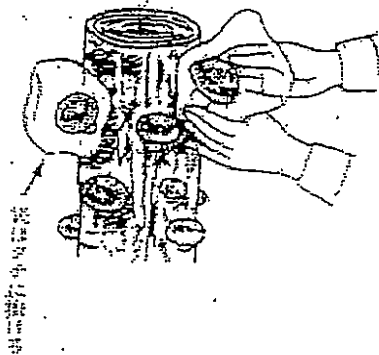
「ビニール被覆」

- 保温、保湿による成育促進や雨子対策に効果的
- ・被覆はほだ木をすっぽりと覆い、風が入り込まないように裾をしっかり止めておく（密閉しないと保温保湿効果が減少）

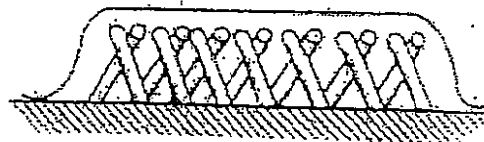
◎注意点

- 直射日光が長時間当たりやすい箇所は温度が上がりやすい。
- ・採取後は長期間ビニールを被覆しない。

〈袋掛け、ビニール被覆〉



ビニール被覆



ミニハウス



資料：菌茸'05.1